

☆スポーツ振興大賞☆	
作品名 応募者	昭和新山国際雪合戦 昭和新山国際雪合戦実行委員会（北海道有珠郡壮瞥町）
<p>作品の概要</p> <p>昭和新山国際雪合戦は、昭和 52 年から 5 年にわたった有珠山噴火の影響で観光客が大きく減少した当地において、地域の若者が中心となりアイデアを出し合い、ルールを作り平成元年に第 1 回大会を開催した。以来、平成 30 年まで 30 回の開催を誇り、競技人口は 2 万人とも言われるまでに発展した。参加チームは毎年 142 チーム 1400 名ほどが昭和新山に集い、熱い戦いを繰り広げている。欧州・北米・中国にも連盟ができたほか、国内各県に連盟が発足し、競技としてその発展と向上に努めている。</p> <p>第 30 回大会での海外チームはカナダ・フィンランド・中国から各 1 チーム 10 名づつ 30 名、道外からは一般の部 37、レディーズ 5、ジュニア 1、合計 43 チーム 430 名が参加した。北海道を含め、本大会出場権をかけて全国で 19 大会ほどの予選を開催し、壮瞥町や関係団体、延べ約 700 名ほどのボランティアが大会運営・設営・受付・レセプション等の運営に携わっている。大会に関わる報道は、地元新聞ほか HTB テレビで特別番組が毎年組まれている。北海道遺産にも認定され、地域おこしイベントから競技性を追求するとともに全世界に雪合戦仲間が増えることにより、「遊び」から「スポーツ」へと発展させ、オリンピック競技を目指すまでに成熟してきている。30 回の節目を迎えて、次の 30 年に持続可能な形で次世代へ残していきたい。</p>	

☆スポーツ振興賞（6 作品）		
ス ポ ー ツ 庁  長 官 賞	作品名 応募者	レッツパトラン！ランニングで社会貢献 NPO 法人改革プロジェクト（福岡県宗像市）
	<p>作品の概要</p> <p>「街を走ってパトロールする！」パトランを軸にした地域安全づくりを進めている。2013 年に福岡県の宗像市で発祥し現在は全国 29 の都道府県で展開するまでに広がった。メンバーは全国で 1,000 人を超え全国に 9 つのチームが存在。街頭犯罪が増加する夜間時間や子どもを狙った被害が急増する子どもの下校時間帯を中心に 30 分を目安にパトロールを実施。若い世代の割合と女性の参加率が高く、およそ 8 割は 20 歳～40 歳代の世代で構成し、女性の参加率は全体の 4 割ほどを占める。100% 自主参加のため強制感はなく、メンバーが使命感と責任感を持って全国各地で活動を進めている。</p> <p>活動のきっかけは、知人女性が駅から自宅へ帰宅する途中で不審者の被害に遭う事案が起きたこと。同じような被害に苦しむ人たちを出さないために何かできないかを考え、パトランをスタートさせた。「子どもや女性、お年寄りが安心して暮らせる地域の実現」をビジョンに掲げ、街頭犯罪ゼロの地域づくりを推進している。2020 年の東京オリンピックまでに、この活動を全国 47 の都道府県で展開し、世界に向けて日本の誇れる文化として発信することを目指している。</p>	
観 光 庁  長 官 賞	作品名 応募者	東京グレートツアーズ 株式会社アライブ・アンド・キッキング（東京都中央区）
	<p>作品の概要</p> <p>ビジットジャパンキャンペーンが奏功し、訪日外国人客数が 700 万人を超えた 2005 年に 4 台の自転車を購入して東京グレートサイクリングツアーを始めた。12 年目を迎え、1 つだったコースが 7 つに増え、年間 5 1 人だったゲスト数も 2,000 人を超えるようになった。このような小さなビジネスは他に誰もやらないだろうと思っていたが、昨今は、都内でガイド付き自転車ツアーを運営している個人・企業は全部で 10 は超えている。ツアー開始時にホテルに営業に行くと「自転車ツアーなど危なくてありえない」と言われたのが隔世の感である。</p> <p>2010 年に間借りしていた新橋から茅場町に引っ越したところ、事務所の横に運河があり、年末にカヤックを 3 艇買ってカヤックツアーを始めた。さらにランニングが趣味の仲間がいたことからランニングツアーを 2013 年に開始し現在の形態になった。ツアー開始時よりのモットーは運営している自分達が楽しいと思えるツアーにすること、ツアー参加者に別アングルからの東京や日本を案内して、東京自慢、日本自慢ができるツアーにすること、そしてツアーに参加したゲスト、ガイドが宗教、人種を超えて友達になれるツアーにすることとしている。</p>	

<p>経済産業省 商務・サービス審議官賞</p>	<p>作品名 応募者</p>	<p>未来の運動会プロジェクト 一般社団法人運動会協会（神奈川県横浜市）</p>
<p>作品の概要</p> <p>未来の運動会とは、既存の運動会を拡張し、参加者自らが新たに競技を作り、遊ぶことができる未来志向の運動会である。市民が自分たちの手で自分たちに合ったスポーツを作るので、年齢や性別、運動神経の良し悪しに関わらず老若男女誰でも参加できる。本プロジェクトは2014年にニコニコ学会β運動会部で始まって以来、この運動会を普及させ「スポーツの消費者ではなく、生産者を育てる」ことを目的に、これまで東京、山口、京都、大阪等6都市で10回を超えて開催。各回200人程度の市民が参加している。山口市営山口情報芸術センター YCAM との共催やスポーツ庁委託事業受託のほか、多数のメディア掲載、地元企業との協業、観光資源としての発展等、地域文化・経済への広がりを見せている。</p> <p>当団体やYCAMがお手本となり、各地の地域自治体や小学校に「スポーツハッカソン」と呼ばれる競技作り部分のノウハウを共有することで、地域が自立してこの運動会を開催できる仕組みを作っている。2020年東京オリンピックの追い風にのり、かつて日本がパラリンピックを普及させたように、未来の運動会が、UNDOKAIとして世界中に普及・浸透する未来を目指し、プランが進行中である。</p>		
<p>日本商工会議所 奨励賞</p>	<p>作品名 応募者</p>	<p>母なる湖“琵琶湖”を舞台に、民間活力から国体会場へ びわ湖トライアスロンin近江八幡実行委員会（滋賀県蒲生郡竜王町）</p>
<p>作品の概要</p> <p>2013年にアスリートの「びわ湖でトライアスロン大会を開催して欲しい」という声から、地元近江八幡商工会議所「はちまん青年経営者会」と「滋賀県トライアスロン協会」そして第3セクターである「まちづくり会社 まっせ」の3者で実行委員会を発足した。警備、安全対策、観客動員、地域経済活性化、資金調達、住民説明会、会場設営、ボランティア集め、等々様々な困難を乗り越え2017年6月の第3回大会まで継続して開催。</p> <p>第3回大会からは、地元近江八幡市において同大会を「特定目的事業」と認定頂き、ふるさと納税の仕組みを活用することが出来ました。これによって、アスリート用の返礼品に参加チケットを贈るパターンで約100万円、特定目的事業としての一般ふるさと納税で約300万円の資金を得ることが出来た。第4回大会からは「ふるさと納税」に加え、totoの助成金も252万円決定し、更に、「滋賀国体」のトライアスロン会場が近江八幡市で決定しました。第4回大会ではパラジュニアに加え、エイジリレー部門でのパラ選手の参加が可能となり、また、滋賀県と取組んできた視覚障がい者のためのタンDEM走行（2人乗り）が解禁となり「人に優しい大会」コンセプトについてもクオリティの向上に努めている。</p>		
<p>スポーツツーリズム推進機構 会長賞</p>	<p>作品名 応募者</p>	<p>自然を満喫する新しい旅のかたち ジャパンエコトラック ジャパンエコトラック推進協議会（大阪府大阪市）</p>
<p>作品の概要</p> <p>「JAPAN ECO TRACK」とは、カヌー・自転車・トレッキングなどの人力による移動手段で、日本各地の豊かで多様な自然を体感し、地域の歴史や文化、人々との交流を楽しむ新しい旅のスタイルである。ジャパンエコトラック推進協議会は、旅行者が、このような旅を365日いつでも快適に楽しめる受け入れ態勢づくりを地域と連携して推進している。</p> <p>具体的な取り組みは、ルートの情報や地域の魅力をまとめた共通のデザインのルートマップの作成、自然志向の旅行者への広報、快適な旅をサポートする地域の協力店の募集と登録、自転車を運べるよう交通インフラとの連携、宿泊場所までの手荷物の配送サービス、レンタルの整備などである。現在登録のエリアは、国内で14エリア。北海道から沖縄まで、それぞれの特性を活かした旅のルートを国内外に広く発信し、旅行者の来訪を促進することで地域の活性化を目指している。</p>		

スポーツ健康産業団体連合会 会長賞	作品名 応募者	～きっと出会える 人・夢・愛～おきなわマラソン おきなわマラソン実行委員会（沖縄県沖縄市 (株)琉球新報社）
	作品の概要 おきなわマラソンは「きっと出会える 人・夢・愛」のキャッチフレーズのもと、沖縄県中部地域の9市町村が一体となって開催し、2018年大会で26回目を数えた。基本種目のフルマラソンと10kmロードレースに加え、近年ではハーフマラソンやリレーマラソン、職域対抗戦などの新規種目も積極的に導入し、多くの方が参加しやすい大会作りを目指している。健康づくりや競技力向上のみならず、大会を契機とした県内中部エリアの地域活性化も目的の一つとしている。会場内での物産ブース出展や地域の飲食店を集めたグルメイベントの併催、観光アプリとの連携など、参加者に中部エリアの魅力を伝えることにも注力している。東京マラソンや日本海メロンマラソンとの連携の他、2018年大会ではタイのプーケット島で開催された「プーケソン」との交流も開始。互いの会場で大会開催をPRし、選手の相互派遣も行った。 大会の最大の魅力ともいえるのが“沿道の声援”。地域住民からはランナーに対し分け隔てなく地域色豊かな食がふるまわれ、熱い声援が送られる。参加者からは毎年「声援のおかげで完走できた」との感謝の声が届く。沖縄入域観光客数がハワイ超えの900万人を達成し、1千万人到達が目前となった今、大会を契機とし更に沖縄が発展するよう尽力し、参加者と地域全体が楽しめる大会づくりをしていきたい。	